

特集

「日常臨床検査で測定する血清酵素の欠損症」を
刊行するにあたって

血清酵素の測定は早いものでは20世紀初頭から始まっているが、今でもスクリーニングをはじめ、細胞傷害のマーカー、機能障害のマーカー、産生誘導のマーカーなど、特定の目的でも使用されている。また、アイソザイムの概念が生まれたのは、1950年代のことなので、こちらも還暦を迎えている。これまでに、ほとんど全ての血清酵素の欠損症が発見されてきた。臨床症状と深く関係するもの、(奇異な)検査データから気がついたものなど、発端は種々ある。

血清酵素の主な働き場所は細胞内のものが多いが、細胞外のものもある。今一度、原点に立ち戻り、その血清酵素の生理的な役割、臨床検査としての意義を見つめ直してみよう。本来の機能は欠損症を見つけることから始まるという言葉もある。欠損して起きたこととの関係を改めて見てみよう。そして、今なお現役で、日常検査の現場で日々活躍している彼らを改めて注目してみよう。これまで知らなかったこと、気づかなかったことに巡り会える機会となると信じて。

前川 真人

浜松医科大学医学部 臨床検査医学 教授